



高野 秀機 氏 (撮影：2001年 向山氏壮行会にて)

高野さんは、生涯にわたりテニスと、山登りとシャクナゲの園芸を楽しんでいた。テニスについては、優れた運動能力に恵まれて豪快なプレーヤーであった。壮年（ベテラン＝40歳代）になって、いよいよ実力を発揮して、茨城県大会や東海村のテニス大会で、度々優勝するという実績を残している。また、大学生の時に山岳部に所属したことがあったとのことで、強健な体躯に重いリュックサックを背負い、堅実、かつテニス同様の豪快な山登りであった。山行きは、目指す山のシャクナゲがちょうど咲く季節に仲間を誘って出掛けることが、よくあった。那須の山々を歩いた時も、日光・白根山の山行きも、また、はるばる屋久島・宮之浦岳に登った時もそうした時期であった。

高野さんが亡くなった時に、彼が常に手入れに勤しんでいた御宅の庭のいろいろな貴重なシャクナゲの花が咲いていた。生前に彼は「茨城県内にあるシャクナゲの木の下の埋葬（樹木葬）」を願っていて、ご遺族はその願いを叶えたという。

高野さんは、俳句の趣味もあり、芭蕉のゆかりの地を訪れた時に、そこで即座に一句詠んだことがあった。芭蕉に因んで歌人西行にも関心を寄せていた。

「願わくは 花の下にて春死なん その如月の望月のころ」

と詠んで、西行は願いどおりに逝ったという。西行の花とは、桜であった。

「願わくは 花の下にて初夏に逝かん その風薫る東雲のころ」 (詠人しらず)

この花は、シャクナゲである。また、有名な朝型早起の高野さん、旅立ちも早朝（東雲のころ）とは！ 真にそんな高野さんらしい逝き方であった。

(2010年5月29日 T.S.氏)



1976年7月 富士山登山

富士山八合目にて、リュックサックに入れて登ったワインで乾杯

高野さん（33歳：左）、田坂完二さん（中央：原研後、名古屋大教授（故人））と共に



1986年7月 原研東海研テニス部合宿 軽井沢にて

高野さん（43歳：後列左から4人目）



2000年8月 甲斐駒ヶ岳山頂（2965m）にて
高野さん（57歳）、原研の山行仲間（中央：半田宗男さん（故人））と共に



2001年10月12日 向山氏壮行会にて
高野さん（58歳）



2001年 核変換グループ飲み会にて 高野さん（59歳）



2004年5月16～19日 HPPA 第四回国際会議（韓国、Daejon）にて
高野さん（61歳）



2005年10月 人影のない晩秋の尾瀬・大江湿原を行く高野さん（62歳）



2007年5月 屋久島 縄文杉の前で
高野さん（64歳） 原研の山行（及びテニス）仲間と共に
旅の目的： 屋久島で { 宮之浦岳（1936m）登山
ヤクシマシャクナゲを観る
縄文杉に逢う

